ドイツ自然哲学者バーダーに学ぶ「生命エネルギー」理論

神奈川大学外国語学部教授 伊坂青司

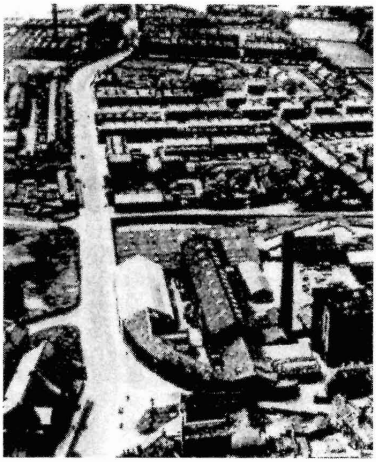
ドイツ・イギリスの産業革命とロマン主義

そもそも環境としての自然が、哲学の問題として近代において考察の対象になったのは、いつ頃のことであろうか。それは18世紀の末、とりわけドイツにおいてである。ということは、それはすでに200年以上も前、しかも工業化社会に入る前のことである。その時期のヨーロッパにロマン主義の思想文化潮流が現れ、とりわけドイツにロマン主義的な色彩の濃い「自然哲学（Naturphilosophie）」が形成された。その「自然哲学」は、ヨーロッパが科学技術の時代に入りつつあった時代に、工業化社会の到来を予見しつつ、自然環境と人間の関係を根本的に、しかも哲学の問題として問おうとしたのである。最初の環境哲学ともいうべきこの「自然哲学」には、近年のドイツが環境保全の先進国であることからも伺い知ることができるように、現代にも通じる知見が含まれている。

「自然哲学」形成の背景には、18世紀半ばから始まったイギリスの産業革命がある。産業革命を推進したのは他でもない石炭であって、石炭を燃やし、その熱エネルギーで蒸気タービンを回し動力を得て、それまでの手工業は機械制工業へと転換していった。輝かしい産業革命は、しかし同時に石炭燃焼

による大気汚染など影の部分をも生み出すことになる。イギリスの産業都市は、生産の飛躍的躍進とともに、いち早く環境問題に直面することになったのである。

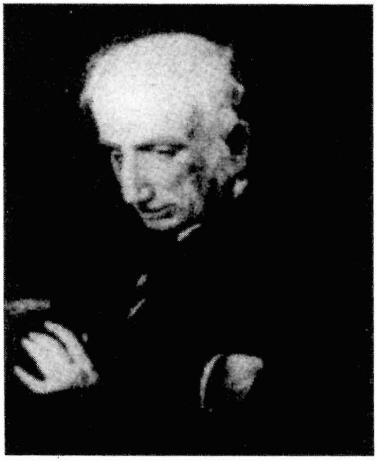
こうしたなかで、18世紀末のイギリスにワーズワースやコウルリッジなどのロマン派詩人が輩出してくる。彼らは都市を逃れて湖水地方に住み、自然との共感を詩的言語で表現した。魂を癒してくれる湖水地方の「自然」は、彼らによって産業都市の背理として再発見されたのである。イギリス・ロマン派の形成と時期を同じくして、いまだ産業の後進国ドイツから先端技術を習得するためにイギリスに渡った知識人たちがいた。彼らは遠からず自国にも形成されることになるであろう工業化社会の未来を、イギリスの産業都市のなかに垣間みたはずである。



ランカシャー県の工業労働者住宅
（『もうひとつのイギリス史』（中央公論新社）より）

フランツ・バーダーの自然哲学

そのうちの一人で、後に帰国して「自然哲学」を提唱することになるF・バーダー（Franz Xaver von Baader：1765～1841）を紹介することにしよう。彼はドイツ自然哲学の代表者と見なされるシェリングに隠れて影が薄いが、それでもイギリスでの体験を踏まえた独自の自然哲学には、今日の環境哲学を考える上でも見るべきものが少なくない。



ワーズワース
（William Wordsworth：1770-1850）

『ヘーゲルとドイツ・ロマン主義』
（御茶の水書房、2000）

ミュンヘンの清浄な空気のなかで生まれ育ったバーダーは、当時としては最先端の学問分野であった鉱物学を学んだ後、採鉱技術の習得のためにイギリスに渡った。しかし環境汚染など工業化社会の現実を体験して鬱屈とした気持ちで帰国した彼は、自然環境と人間身体の関係を改めて考え直して、自然哲学を構想していったのである。彼の自然哲学の特徴は、熱学を基礎にしてそれを生理学と結びつけ、さらに人間の身体を「生命エネルギー」から捉えようとするところにある。人間身体の自発的で能動的な活動が、外部的な力からではなく、「カロリック」と呼ばれる身体内の熱素と「空気」の結合から理解され、燃焼作用によって発生する「生命エネルギー」に基づけられるのである。こうして燃焼に不可欠な元素である「空気」に、身体生命に「自発性」のエネルギーを供給するという特別な役割が与えられることになる。

このような「生命エネルギー」理論の基礎には、バーダーの自然全体についての哲学構想がある。それは古代ギリシアの自然四元素説を踏まえたもので、水・火・地・空気によって構成される。冷の元素である水の凝集力と熱の元素である火の膨張力の均衡のもとで、地の元素は生命の形成を促し生命のさまざまな形態を産み出してゆく。そしてそのような生命の活動に活力を付与するのが、神的な元素としての空気だというわけである。空気に与えられたこのような高い位置づけは、それが生命体一般に、そしてまた人間身体の活動にとって不可欠なエネルギーを供給する元素であることによる。そうだとすると、この空気が汚染されることによって、人間身体は健康を阻害され、生命の流動性を失って病気になるということになる。

人間を取り巻く自然環境と人間の身体生命

人間を取り巻く自然環境と人間の身体生命は不可分に結びつき、有機的に関連している。バーダーをはじめ、ロマン主義的な自然哲学にはそのような基本的視点が貫いている。しかしそれまでの自然科学

は自然を、人間理性の外部にあって、理性の力によって解明され、そして人間のために利用されるものとして理解してきた。人間身体もまた自然に属しているかぎり、理性にとっては外部にあるものでしかなかった。しかし理性の働きが身体の在り方によって規定されることは、私たちの日常的な経験のみならず、生理学や医学の知見によって明らかであろう。身体が病気になれば理性の明晰さは失われ、血液循環に支障が生じれば理性の働く部位である脳は、その機能を喪失する。そうだとすると、理性もじつは身体の生命活動に依存していると考えられ、近代哲学において与えられてきた特権的な〈「超越論的な」〉地位も怪しくなってくる。

むしろ現代において果たすべき役割が理性にあるとすれば、それは近代理性が推進してきた科学技術と工業化社会の在り方を自ら反省し、人間と自然環境の関係を根本的に捉え直す倫理的視点を身につけることであろう。近代理性はロマン主義の運動を非理性的な幻想や懐古趣味のように蔑んできたが、しかしバーダーにみられるように、ロマン主義的な自然哲学には、科学技術が見落としてきた〈自然の知恵〉が豊富に含まれている。現代において環境哲学を構想するにあたって、このような知恵が格好の手がかりを提供してくれるにちがいない。

いさか・せいし
1948年三重県生まれ。東北大学文学研究科博士課程哲学専攻終了（文学博士）。主著に、『市民のための生命倫理』（御茶の水書房、2001年）『ヘーゲルとドイツロマン主義』（御茶の水書房、2000年）。